

近年、循環器病患者数の増加とそれに費やされる国民医療費の増大が著しく、国全体で対策していく必要性が認められ、2018年、「健康寿命の延伸等を図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法」が可決・成立しました。それに先んじて関連学会では、2016年に脳卒中と循環器病克服5カ年計画を立て対策をしてきました。しかしながら、令和4年度の傷病分類別医科診療医療費（疾患別に費やされた医療費）において、「循環器系の疾患」で費やされた金額は最も多く（約6兆1,731億円）、それは全体の約五分の一を占めています（令和4年度国民医療費。厚生労働省、2024年）。さらに65歳以上の高齢者においても、循環器疾患患者が費やす医療費の割合が年齢区分全体の約25%を占め、最も多くなっています。そのため、循環器病克服5カ年計画をさらに現実に即して実施していくために、2021年には二次5カ年計画が作成されました。そこでは循環器疾患をStage1～3に分類し、ポピュレーションアプローチ、ハイリスク状態の対象の検出と早期のアプローチ、発症時の早期受診と治療の促進を示しています。

このような社会情勢の中、循環器看護に携わる臨床家、研究・教育者の果たしていく役割は、今後ますます拡大していくと予想されます。同時に、これまで医療に主軸を置いていた看護師にも、循環器疾患の一次予防から三次予防を見据えた啓発をも含むサービス提供体制の構築や、国民のニーズに応じて循環器看護を柔軟に発展させていくことができる力と広い視野が必要になってくると考えられます。

循環器病対策の先進国である米国では、循環器看護を以下のように定義しています。“循環器看護とは、循環器系の健康が生涯にわたり最善となるようにする専門的な看護ケアであり、そのケアには循環器疾患の予防、発見、治療が含まれる。またその対象は、すべての年齢層の個人、家族、地域、またはある特定の健康問題をもった集団である”（American Nurses Association & American College of Cardiology Foundation, 2008）。

これらを受けて本書は、「循環器疾患を学ぶための基礎知識」「循環器の疾患と看護」「事例で学ぶ循環器疾患患者の看護」で構成しました。そして、16～18章の事例には、これからの社会で求められる循環器看護の三つの実践例を掲載しています。

また今回の改訂では、看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）やガイドラインに準じて解説をアップデートし、新しい循環補助装置や薬物療法などの解説を加筆しました。加えて、「心電図検査」「胸部X線検査」「心エコー法」の動画を新たに制作し、検査の実際やポイントを動画でご覧いただけるようになりました。

本書が、循環器看護の基礎知識や思考過程の基盤構築のために活用いただけることを切に願うとともに、今後ますます複雑化・多様化する看護専門職の看護基礎教育や臨床での人材育成を支える一助となれば幸いです。

最後に、本書の編集・監修を共に手掛けてくださった野原隆司先生、三浦英恵先生、山内英樹先生、本書の主旨をご理解くださりご執筆いただいた先生方、関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。